109 水田におけるアキアカネ幼虫のシナハマダラカ幼虫に対する捕食（再評価）
池本孝哉（帝京大・医） 浦辺研一（埼玉衛研）

Prey-predator relationship between larvae of the mosquito *Anopheles sinensis*
and nymphs of the dragonfly *Sympetrum frequens* in rice fields. (Revaluation)
Ikemoto T. and Urabe K.

埼玉県の水田地帯において、アキアカネ幼虫はシナハマダラカ幼虫を効率よく捕食している実態について、これまで報告してきた。これら一連の調査において採用した、アキアカネ幼虫の消化管内容物に対する血清反応による検出方法では、捕食の事実は確認できるが捕食数まで知ることができない。したがって、たとえば「1979年6月中旬、約1 km四方の水田地帯には 375万匹のアキアカネ幼虫が生息しており、このうち68万匹が少なくとも1匹のシナハマダラカ幼虫を捕食した」と推定している。

今回、捕食者と被捕食者がランダムに遭遇したときに捕食が起こると仮定し、さらにアキアカネ幼虫の日周活動や血清反応による検出可能時間など、時間的要因を考慮して、単位時間あたり捕食数をより適正に推定した。これらの結果に基づき、水田地帯における捕食状況を検討したところ、より効率的な捕食の実態が明らかとなった。

110 植生写真解析による蚊生息環境の記載と評価、95年8月石垣島の結果

○高木正洋・津田良夫（長崎大・熱研・生物環境）、杉山章（名古屋女大
家政・公衆衛生）、丸山勝巳（三重衛研・疫学情報）和田義人（長崎大・
熱研・生物環境）

Vegetation photograph analysis to evaluate the mosquito habitat:
results in Ishigaki Island, August 1995

Takagi M., Tsuda Y., Sugiyama A., Maruyama K. and Wada Y.

ひとつの地域内で観察される、蚊相の場所的な相違の生起要因として、植生を中心とした環境の景観的属性を無視出来ない。これまでの属性記載は、記述的か蚊の定着にとって意味のない記載（純植物生態学的記載）がほとんどなので、地域間比較や評価を客観的に行うのは無謀に近かった。この問題を段階的に克服し、環境変化に伴う蚊相変化の予測に供するため、先ず植生等による蚊生息空間の被覆度（仮）というパラメーターを案出した。いくつかのフィールドについて一定規準に従い撮影した生息環境の標準写真を分析し、被覆度を算定、パラメーターの合理性について検討中である。今回は95年8月にサンプリングした石垣島浦底湾岸部の結果について報告する。